川端康成「水晶幻想」のレトリック
――科学言説と内面描写――

橘川智哉

川端康成の「水晶幻想」は、『改造』昭和六年一月号に前半部「水晶幻想」、同年七月号に後半部「鏡」というタイトルで発表され、昭和九年四月に『水晶幻想』として改造社から刊行された作品である。本作は、子供のいない夫婦の不妊をめぐる葛藤が扱われている。「発生学」と「人工妊娠」に関する夫婦の会話や、飼い犬の交配の様子などが描写されるなかで、（　）で括って示される夫人の内的独白を含みながら物語は展開していく。夫への懐疑、少女のころの記憶など、膨大な言葉の羅列で複雑さを増すこの内的独白は、夫人の意識の動きそのものを描写していると考えられる。

「この作に用ゐた手法は、当時の流行に倣つたにちがひない」[1]と川端が述べるように、「水晶幻想」は同時代の文体表現における〈実験小説〉の試みであった。先行研究においては、ジョイスの「意識の流れ」を取り入れた文体の実践と見なすものや、フロイトやハヴロック・エリスなど同時代の精神分析の影響に焦点を当てた議論がなされてきた[2]が、一方で、同時代の社会的なコンテクストとの関わりについてはあまり論じられてこなかった。しかし、たとえば作中の夫は「発生学者」であり、夫人の意識にも「発生学」に関する記述が多く見られるように、本作は同時代に盛んに議論されていた発生学を背景としている。また、作中には「人工妊娠」という不妊治療法も登場する。これらはどのような社会動向をコンテクストとしているのだろうか。

「人工妊娠」とは、大正から昭和にかけて認知され始めた新たな不妊治療法であった。採取した精子を子宮内部に直接流し込むという、いわゆるＡＩＨ（配偶者間人工授精）やＡＩＤ（提供精子による人工授精）と呼ばれるこの方法は、女性の妊娠率を向上させる効果が期待されていた。国内における「人工妊娠」治療については昭和二三年に慶應義塾大学教授の安藤画一が行ったものがはじまりとされているが、それに先立つ昭和初年代には、婦人科の開業医たちによる成果がすでに報告されている[3]。「水晶幻想」

では、夫人が過去に一度「人工妊娠」治療を受けたことが語られるが、それは専門の医師によるものではなく、「発生学者」の夫が直接行ったものであった。「ピペット、ピペット。それから注ぎこまれる液体の、なんであるかを知ってゐるのは、夫だけなのだわ。もしやほかの動物の、おお？」とあるように、「人工妊娠」治療は、異種族同士の「交配」という「実験」である可能性も示唆されているのである。物語内における、こうした「発生学者」による「人工妊娠」の位置をみていくために当時の社会的状況を踏まえておく必要があるだろう。

大正から昭和初年にかけて、科学が妊娠・出産をコントロールするという思想は広く浸透していった[4]。大正一一年、アメリカの産児調節運動家であるマーガレット・サンガーが来日する。彼女の訪日は、石本恵吉らの日本産児調査研究会発足の後押しとなり、国内の産児制限運動を活発化させた。こうした流れのなかで、内閣では昭和二年に「人口食糧問題調査会」が設立される。安定した人口の確保のために、優生遺伝による人口の統制が目論まれることになったのである。このような同時代の科学言説の高まりに対して、川端は次のように述べている[5]。

例えば産児制限論なぞもアメリカニズムだと云ふ人がある。サンガア夫人でアメリカニズムか。そして産児制限の科学を嫌ふのは、センチメンタルな感情の因習だとの説がある。しかし、もつと非センチメンタルなものは、人工妊娠術だ。日本で子を産む人が、なかなかあるらしい。また科学は、人間の男女の性の決定は、生殖細胞の性染色体が一個多いか少ないかによると説く。アメリカニズムなんかよりも、この科学と云ふ奴だ！今に思ひのまま男女何れかを産ませるだらう。やがて、人間を科学的に製造するだらう。

川端は、関東大震災の復興以降「ラジオや活動写真」にまで影響を及ぼす「アメリカニズム」の背景にある「科学」の蔓延に警鐘を鳴らしている。「人間」の性差を「思ひのまま」に調節することを可能にするような「科学的」態度に対する危機感である。川端は、「科学」が妊娠・出産をコントロールすることを「製造」と捉えるのである。科学の発展の裏にあった影の部分である生命倫理の問題意識が川端にはあったといえるだろう。こうした観点を踏まえれば、「水晶幻想」は、単に新たな文体による心理描写を目論んだ〈実験小説〉にとどまらない可能性を孕むテクストとして考えられるはずだ。

もっとも、「人工妊娠」は、はじめ家畜の品種改良として広まったものであった。しかし、人間に施す際、人為的な出産が可能となることの是非を問うこと、また、そこに伴って顕れる優生思想や優生学に関わる問題が浮上する。人類の遺伝的改善のために優位とされる遺伝の発展を目指すこれらは、一方で、劣位に置かれる遺伝を淘汰しようとするものでもあり、その価値判断には常に生の倫理に関わる問題が横たわっているのである。

以上のような状況から考えると、「水晶幻想」は、当時の科学的な知見を作品内に反映させつつ、「発生学者」である夫が夫人に施した「人工妊娠」治療後の夫婦の姿を描いた物語であるといえよう。治療を「発生学者」が行うことで、「実験」的な色合いが強調されるが、ついに夫婦に子供は出来なかった。「人間を科学的に製造する」試みの失敗が本作の前提にはあるのだ。

本稿では、「水晶幻想」が同時代の「発生学」や「人工妊娠」といった科学言説を主題に据えた点に注目する。そこに含まれる「人間を科学的に製造する」ことへの優生学や生命倫理に対する問題と内的独白箇所に見られる特徴的な文体とは作品内でどのように響き合っているのか。作品の主題と文体との問題を照合させながら、同時代パラダイムに対して本作品が照射した問題を捉え、内容と表現に込められた批評性の在処を明らかにしたい。

一　「人工妊娠」をめぐるパラダイム

まず、同時代の社会的文脈と「水晶幻想」との接続を試みるために、昭和初年代における不妊をめぐる問題と、その治療方法である「人工妊娠」とがどのように扱われていたのか確認してみよう。「水晶幻想」は家庭内の夫婦の様子を描いた物語だが、たとえば、夫が犬を飼うことを提案したとき、夫人は「ええ、でも、お宅にはお子さんがいないからつて言はれると、私ぞつと身ぶるひするのよ。」と答える場面がある。こうした会話にも、不妊の夫婦に対する社会の反応を窺うことができる。子供を持たない夫婦は、犬を飼うにしても「お子さんがいない」ためであると思われてしまうのだ。

大正期、生理学者の越智真逸、婦人科開業医の大久保義一や朝岡稲太郎らが、それぞれの著書のなかで「人工妊娠」治療の実践報告を行った[6]。なかでも、大久保・朝岡の名は、『主婦之友』の記事「人工妊娠術で子宝を得た実験」（大正一四年一月号）および「人工妊娠によつて子宝を得た経験」（昭和二年六月号）で確認できる。ここでは「人工妊娠術」の成功体験が婦人の語りで述べられるが、悲劇の夫婦が大久保・朝岡のもとで治療を行って健全な子供を授かるといった内容に定型化している。さらには「人工妊娠術」の安全性や注意事項、「大久保研究所」の問い合わせ先なども掲載されている。「子無きは人生の一大悲惨」と謳った言説なども共鳴して、こうした特集は「子宝なき」読者へ呼びかけるものとなるのである。また、女性のみならず、男性向けの強壮剤の広告が掲載されていることから、女性雑誌であっても、男性読者をも視野に入れた特集であったと考えられる。夫婦間の不妊の悩みは公には秘匿される一方で、女性雑誌では「性」をテーマとした記事が積極的に特集されていくのだ。このような夫婦の悩みに応える特集の増加は、不妊に対する当時の夫婦の関心の高さを反映しているのである。

また、大久保や朝岡ら開業医たちは「人工妊娠」治療の普及に

あたって、著書のなかで不妊の夫婦が治療を行うことの必要性を主張する。これは子を産むことが夫婦の務めとされる当時の文化や規範によるものと考えられる[7]。「妊娠分娩」は、社会の発展に貢献するための「婦人」の役割として捉えられていたと言えよう。こうした背景のなかに、「人工妊娠」は「子宝なき」夫婦の救済措置として期待されたのである。しかし、「水晶幻想」における「人工妊娠」治療は、夫婦間に救済をもたらすようには描かれない。むしろ、作中の「人工妊娠」を施すのは「発生学者」による「実験」という側面が強いのである。

作中の夫の研究室が「病理学研究室や解剖学研究室の片隅」に間借りしていることに注目したい。「解剖学」は生物を解剖し、その内部構造のメカニズムを明らかにするものである。また、「病理学」は病の治療を目的とする研究である。その間に位置する「発生学」は、これら両者の特質を融合させたものであるかのように作中では位置づけられているのだ。夫が夫人に施したとされる「人工妊娠」という不妊治療はこのレベルで捉えるべきであろう。

「発生学」とは、生物の個体発生の形態的仕組みを研究する生物学の一種で、昭和初年当時は、ほぼ未開拓の研究分野であった。小林洋介は、本作の「発生学」言説が、同時代に出版された大島廣『発生学汎論』(至文堂、昭和五・五)に準拠していることを指摘している[8]。『発生学汎論』は、専門的な学術書というより、一般人や学生などが読者に想定された書物である。巻頭の「緒論」では、一般読者に向けて「人智を過信し、科学の力を盲信する人々のために自然界の驚異の一端を紹介し、些かその項に冷水を注ぐ事となつたならば幸」であると述べられている[9]。当時としてはまだ新興領域であった「発生学」研究の早い段階から、本書は「科学の力」に倫理的な価値判断がつきまとうことを予見していたのである。

「発生学者」の探究心は、「病理学」的な治療を前景化させて「解剖学」的な「実験」を試みる。「人工妊娠」治療が施されたという事実は、夫人の精神的な苦痛の要因となって、作中に強い影を生じさせている。こうした「人工妊娠」に「妊娠分娩」が国家繁栄の礎となるような側面は描かれてはいない。むしろ、不妊をめぐる夫婦間の不和や格差としての側面が描かれる。次の引用は、夫が夫人に医師の診察を再度受けることを提案する場面である。

「お前もう一度よく医者にみてもらつて来てくれないかね。」
いきなり夫人は夫を罵らうとした。頬を染めてうなづかうとした。しかし、夫人は化石したやうに青ざめたのであつた。
「なんだお前、医者の娘ぢやないか。」
(奥さんの落度ぢやありません。)と言つた若い医者の言葉が、夫人の胸の鼓動に蘇つて来た。そして、その時医者に感じた激しい憎しみを思ひ出した、(マルタ。マルタ。お父さん。)

夫は夫人の身体に問題があるという認識のもとで語りかけている。しかし、夫人が思い出した「若い医者」の言葉には、不妊の

原因が夫にあることが示唆されている。不妊をめぐる同時代の言説として、『安産と育児法』（主婦之友社、昭和七・九）をみると、「精虫の異常」や「女子に痲毒を感染」させることなどが原因として挙げられており、「三分の二の多数」が「男子側」に不妊の原因を見ている。「不妊症」は決して「婦人」側だけの問題ではなかったのである。しかし、当時の社会では「男子側」の「性」病は隠匿されてしまうものであった。川村邦光は、大正・昭和期の女性雑誌の隆盛が「家庭医学」の通俗化をもたらしたという認識のもとに、「女性読者」の間で「女性特有の病気や衛生が共有」され「公然化」「顕在化」していく一方で、「男の心や身体の悩みや病気は潜在化もしくは隠蔽化され」たことを指摘している(10)。このように夫婦で不妊の原因を問う場合には、女性のみの問題に焦点が当てられ、不妊治療の対象が女性の身体のみとなったのだ。『安産と育児法』に見られる記述は、こうした前提に対する提言でもあったのだ。

夫人が、「若い医者」に対して「激しい憎しみ」を覚えたのは、子供を自然分娩できないという事実と、それによって引き起こされる社会的な糾弾が、全て彼女の責任とされることから生起したものである。しかし、夫人はそのことを夫に告げることができない。一方で、夫は「発生学者」として専門的な知識を有しているはずなのにもかかわらず、「不妊」の原因が自身の「インポテンス」にある可能性を考えることはない。あくまでも夫人の身体にのみ原因を求めるのである。昭和初年における男性性の規範に裏打ちされる格差は、告げられない夫人と気づかない夫というふたりの姿に一層強く顕されている。そして、それは『発生学汎論』で洞見されていたような「科学の力」の愚かさを、アイロニカルに描いたものであるともいえるだろう。

二　優生学と「人造人間」

前節までは、「人工妊娠」治療が夫婦間に不和をもたらすものとして描かれていたことを確認した。こうした不妊治療に対する夫人の嫌悪感は、人為的な産児の是非をめぐる優生思想的な問題へと発展する。本節では、同時代の社会的な優生学の受容のなかにおける本作品の批評性を考えたい。

先にも挙げた大正期の生理学者・越智真逸は、「人工妊娠」治療を推奨するなかで「人工妊娠術によりて生れた子は完全」であることを主張した。越智によれば、「人工妊娠術」は「人工的に男性の精液を子宮内に送入する」ため、「天然受胎」におけるあらゆる危険性を回避することができるという。そして、その根拠として示したのが、「優生学（ユーゼニクス） Eugenics 及び、遺伝論 Vererbungslehre の学説」であった(11)。この主張のなかで注目したいのは「人工妊娠」推奨のために付与された「優生学」をめぐる言説である。

胎児の出生を「優生上の見地」から調節する「国民優性法」などの議論が盛んになるのは昭和二〇年頃からであるが、昭和二年

七月に内閣で設置された「人口食糧問題調査会」では、すでに「優生上」の問題と人口政策との接続が確認できる。国内で初めて人口問題を主要な課題とした「人口食糧問題調査会」は、避妊などの「産児制限」を公認し、「優生学的見地」にもとづく「人口統制」政策を行うことを示したのである[12]。

このような政策が生まれた背景には、国内における人口問題への関心が高まりつつあったことが考えられる。昭和初年代は、明治期から続く人口過剰論の問題が社会事業方面から検討され始めると同時に、出生率の低下による人口減少のおそれも懸念され始めていた。こうしたなかで、安定した出生率を求めた「国民の質の改善」が「児童保護問題」として掲げられたのである[13]。出生率や死亡率への国家事業レベルでの対策は、「人口統制」という国民の「質」の向上へと接続される。ここで用いられたレトリックこそが「優生学」なのである。

優生学と出生率の向上という社会事業運動との接続は、生まれた児童に優劣の価値判断をもたらす。この価値判断は生命を意図的に産出することへの正当性を主張するための柱となっている。こうした優生学における産児の優劣は、「水晶幻想」においては、母体である産出する側の価値への注目を描き出す。それが示されるのが作中に登場する犬の存在である。物語では、夫婦の会話と並行して犬の「交配」の様子も描かれる。次の引用は、夫人の家に「牝犬」を連れてきたお嬢さんと夫人とが、犬の「交配」を前にして交わす会話の場面である。

「まだ女大学時代ですわ、犬の世界は。でもほんたうは、犬の方がずつと科学的に進んでゐるのかもしれませんわ。いい犬の結婚は優生学の一点張りでございますもの。人間はせつかく優生学といふものを知りながら、それを人間に役立てることが出来なくて、家畜の改良に用ひてゐるなんか。」（セザルのものはセザルに帰し、神のものは神に帰せ。かくて地獄の門是に勝たざるべし。）といふ言葉を口のなかで呟いて、

「ワイアがこの頃ぽつぽつ横浜へ入るやうでございますから、プレイ・ボオイももう直ぐ優生学に見すてられますわ。」

「あら。牡はようございますわ。いつも綺麗なんですもの。牝はひどくやつれるんでございますつてね。毛の長い犬は、お産で毛がすつかり抜けて、飼主の愛はすつかり子犬の方へ移つてしまふでせうし。」

「体の形もくづれて、人間の女とおんなじなんですの。」

「プレイ・ボオイ」は、夫人の前の犬が病死した後に「血統書つき」でやってきた「牡犬」である。会話のなかで、犬の「交配」は「家畜の改良」というより良い犬種に仕立てるためのものであり、「交配」機能の有無が犬の価格を決める要素となることが語られる。注目すべきは、ここでの会話が「女」たちの間で交わされていることである。「犬の世界」は封建的な「女大学時代」でありつつも、「優生学の一点張り」が達成されているが上に「牡犬」で

あっても「見すてられ」る可能性がある。「人工妊娠」治療が施されても「人間」には「性」の格差が生じるが、犬は平等である。この点おいて夫人は「犬の世界」が「科学的に進んで」いると語っている。「優生学の一点張り」が可能とする世界は、「交配」機能だけに価値を置くという性差の垣根を越えたひとつの理想郷なのである。

しかし、ここで交わされる彼女らの言葉には、「優生学」のもうひとつの側面が暗示されている。それは、「優生学の一点張り」の世界のなかで人為的に取捨選択させられる「生」の姿である。「交配」機能の絶対視は、「良い」生殖機能をもつ生物と、それを持たない生物という境界を生み出す。「交配」価値がなくなれば、新たな「生」が補充される。「優生学の一点張り」とは、こうした合理化された「生」システムの様態である。そして、それは多様性を拒み、「良い」とされる生物の同質化を図るものだともいえる。老化していく「プレイ・ボオイ」や「牝犬」に仮託して彼女たちが語るのは、合理化・同質化という「優生学」に脅かされる「人間」の姿への批判でもあるのである。

「優生学」の脅威の構造が「人間」に向けられたとき、何をもたらすのか。それは、「人工妊娠」によって生み出された「人造人間」である。物語終盤の夫婦の会話で、夫人と夫は「美しい象徴」についてそれぞれ次のように語る。

「私は、あなたの実験室から、人造人間の生まれるのを待つてる方がいいわ。その子供を愛する方が発生学者の女房らしいわ。美しい象徴だわ。」

〔…〕

「アミイバには死がない。美しい象徴だよ。親もなければ、子もない。男もなければ、女もない。兄もなければ、弟もない。」と夫は寝間着をひつかけて、夫人の顔の前へマトキシチンの匂ふ手を出した。

昭和初年代における「人造人間」とは、いわゆるロボットのことである。大正一二年にカレル・チャペックの戯曲『R・U・R』の邦訳が出版され、そのなかに登場する「Robot」という造語に「人造人間」という訳が与えられた。この「人造人間」は、容姿は人間と変わらず有機的に培養して作られるものであった[14]。「水晶幻想」のなかで夫人が語る「単細胞生物の生殖」によって生み出された「子供」である「人造人間」も、『R・U・R』の「人造人間」とイメージを共通させる。ここでの「人造人間」は、男女の性差に関係なく誕生することができるというものである。夫人が語る「実験室」で生み出される「人造人間」は母体を必要としない。「人造人間」は「人間」が備える「生殖」機能に関わらずに「製造」することが出来るのである。それはつまり、「生殖」機能をもつ「人間」という存在を不要とし、排除することでもある。

一方、夫が述べた「美しい象徴」は、「死」のない「アミイバ」に表象される。「アミイバ」は、体を分裂させて個体数を増殖させ

ることができる。夫は、その「アミイバ」が生み出すのが、「親も無ければ、子もない」完全な同一体であると語る。何もかもが同質である個体を作り出すことで、個体間の差はなくなる。それが「発生学者」が見出す「死」への回避だと言うのである。

一方、夫人は「発生学者の女房」として、「人造人間」である「子供を愛する」ことが「美しい象徴だわ」と語る。この言葉には、夫に「不妊」と決めつけられてしまったことに対しての皮肉が込められている。自身からではなく「研究室」から生まれた「子供」を受け入れるという、いわば悲劇としての「美しい象徴」である。夫人は人為的に産出可能な「人造人間」を愛することで、「不妊」治療の放棄を夫に宣告しているのだ。しかし、夫は夫人の真意に気づくことなく、楽観的な「発生学の夢」を「美しい象徴」として語る。このような「美しい象徴」という言葉に込めた意味の違いには、生命を人為的に「製造」することを厭わない「科学」の危険性が示されていると言えよう。

三　内面描写のレトリック

ここまで見てきたように、本作に設定されている「発生学者」が施す「人工妊娠」や優生学といった科学的な知見は、「科学」の発展が生命を人為的に「製造」することを問うものであった。次に、物語の表現方法に注目し、文体の特徴について検討したい。

冒頭でも述べたが、この物語の表現は、夫人の内的独白によって特徴づけられている。夫人の意識では、「青空を銀色のつぶてのやうに落ちる小鳥。海を失われゆく銀色の矢のやうに走る帆船。湖水を銀針のやうに泳ぐ魚」のように、「青空」「海」「湖水」に対応して「小鳥」「帆船」「魚」が示される。それぞれは「銀」のイメージを伴って、「落ちる」「走る」「泳ぐ」へと続く。これらの対応関係は躍動する「精子」を想起させるものでもあり、物語全体にわたって夫人の意識に敷衍する「不妊」をめぐる葛藤と呼応する。こうした隠喩的な言葉の連鎖と、その連想によって浮上するイメージでもって夫人の意識は構築されるのである。

しかし、「ああ、美しい私の手。一日に幾十度も洗ふ婦人科医の手。爪を金色に色どつたロオマの貴婦人の手。虹。虹の下の青野の小川」のような「手」の連想は、「虹」や「小川」のイメージからは飛躍する。夫人の意識は、単なる連想だけに止まらず、一見すると偶然とも思えるような、予期し得ない連想も同時に生み出される。また、こうした表現は、次のように語りのなかに複雑に組み入れられるのである。

夫人は鏡のなかに彼女の失つた頬を見て、（人工妊娠のピペット。フレンチ・レタア。寝台に垂れ下がつた、捕虫網のやうな白蚊帳。新婚の夜に彼女が踏みつぶした、夫の近眼鏡。幼い彼女と、婦人科医であつた彼女の父の診察室。）夫人は頭のガラスの鎖を振りちぎるやうに頭を振ると、（いろんな動物の精子と卵

子とのプレパラアトが研究室の床に落ちて、オブゼツト・グラスとデツキ・グラスとがこなごなに破れる音。日光のやうに光るガラスのかけら。）

（　）内の夫人の意識の描写は、医療器具「ピペツト」に始まって、避妊具「フレンチ・レタア」に続き、「新婚の夜」の記憶、幼いころの「父の診察室」といった過去の記憶へと遡る。さらに連想は、砕け散る「いろんな動物の精子と卵子のプレパラアト」へと続き、その破壊されるイメージは、鏡のなかの「彼女の失つた頬」への呼びかけとして構成されている。しかし、一連のイメージのなかには、白蚊帳や踏み潰した近眼鏡、ガラスの砕ける音、光などの細部の描写も重なり、浮かび上がる表象が全体として統合されることはない。細部に言説を拡散させる夫人の意識は、むしろ常に全体の抽象化を拒んでいるとも考えられるだろう。このように夫人の意識のなかでは、一対一対応ではない言葉同士が偶発的に結びつき、無限に拡散していくのである。

こうした夫人の意識の拡散が作品にもたらすものは何か。夫婦の会話によって素描される二人の関係性に注目したい。家に「化粧机」があるところをみると、夫婦が中産階級以上の家庭に設定されていることがわかる[15]が、その夫婦関係には大きな不和が生じている。夫が家庭を顧みないことや夫人を自身の研究室に近づけないことなどが要因として考えられるだろう。さらに、夫は過去に夫人に対して「人工妊娠」手術を施していた。前述したように、結果は上手くいかず、それどころかこの治療が動物実験だったのではないかという不審感を夫人にもたらした。このような緊張関係のなかで、夫は次のように自分の試みを説明する。

なるほど。僕達の恋は発生学の研究室で発生した。発生学といふ科学は、神の創造力と、悪魔の破壊力と、そんな言葉でも言ひ現はせないやうな恐ろしい力を持つてゐると、お前は思つたらしい。それで発生学者の僕を愛した。だけど、その愛は憎しみだつたんだよ。今の僕はさう考へる。つまり、お前が発生学の夢を憎んだんだね。女のなかの母が発生学に組みついたんだね。今だつて、子供をほんたうにほしがつてるのは、僕ぢやない。お前なんだよ。お前はその逆様だと思ひたがつてゐる。それがちやうどいいのさ。お前はだんだん発生学者の立場からものを見るやうにならうとしてゐる。僕はだんだん母の立場からものを見るやうにならうとしてゐる。結婚だな。まあ、夫婦仲がよ過ぎるといふことにでもしとかうぢやないか。

このように、会話のなかでは、夫が夫人の言葉の真意を読み取ろうとする様子がしばしば描かれている。しかし、実際は夫人を自身の研究室から遠ざけ、彼女を家庭内に閉じ込めているのだ。この言葉に対して夫人は「ええ。」と答えるだけで、全てを理解したかのような夫人への反論に窮してしまうのである。夫の言葉は、夫人を縛り付けるものとして機能し、身体的にも精神的にも自ら

の認識の範疇に夫人を囲い込むものとなるのである。夫人の自己意識への内向は、夫による規定と、自己の内面とのずれの顕れにほかならない。その一方で、家庭を半ば放棄して研究に没頭し、「人工妊娠」手術をも厭わない夫の姿は、夫人の「心理」の解剖を試みる「科学」者としての側面を強調したものといえるだろう。

中村三春はこの構造を「人工対自然の対立」と定式化し、「単なる夫の感想を越えて、「水晶幻想」全体の基本コードの一つとなってゆく」と説明する[16]。「人工対自然」、大島廣の言に従えば〈科学対自然〉の対立は、「科学の力」を過信する夫と、身体と精神とを「解剖」される夫人という夫婦の関係性を表したものである。「心理」の「解剖」をめぐる夫婦間の関係性において、夫人の内面描写は「自然」そのものを隠喩的に示しているといえるだろう。ただし、作中で示される夫の科学的な知識が夫人の意識や言動に影響を与えている点も見過ごすべきではない。夫人の内面には「発生学」に関する知識が浸透していることが明らかだが、研究室に近づくことのできない夫人が「発生学」の知識を得る手段は、「夫の話」を聞くこと以外に考えられない。夫人は会話を通して自らの意識のなかに夫から聞いた知識を取り込んでしまうのだ。

しかし、物語はこの対立構造の転倒を容易に見せるわけではない。「科学」言説を取り込んだ夫人の内的独白は、必ずしも「科学」に対峙するようには仕掛けられていないのである。お嬢さんとの会話のなかで、夫人は次のように語りかけていた。

夫の話ですと、人間ほどしあはせな牝はないつて、よく言ふんですのよ。女が男より姿も声も美しいのは、人間だけださうでございますわ。〔…〕人間の女共は子供を産むことを拒んで、人間の女だけを継子あつかひにする自然に復讐したらいいだらうなんて、夫はからかふのでございますけれども、私言つてやりますの、子孫のために生きてゐるといふことを一番はつきり知つてゐるのも人間だし、子孫のために生きてゐないといふことを一番はつきり知つてゐるのも人間だし、この二つのことは、知ればきつと天罰を受ける二つのことだつて。

これに続いて夫人は、「宗教や芸術」が人間の「子孫のため」にあるわけではないこと、「人工で子供を作らうとするやうな考え」が「創世記以前の生きもののない世界」への憧憬でしかないこと、「科学の道」が「死の氷河」へ向かっていることを矢継ぎ早にまくしたてていく。これらは「科学の力」の限界やその末路を暗示したものであるが、お嬢さんからの応答はなく、夫人の一方的な語りかけは独白の体裁と変わらないものであり、直後には、それが「根も葉もない嘘」や「口から出まかせのおしやべり」であったことが明かされる。「科学」に対する夫人の抵抗は、あくまでも夫人のなかで完結されるのみなのだ。夫人の意識では、「発生学」の知識も夫に対する反抗も、数ある言葉の飛躍の構成物となり、拡散を繰り返す。「科学」言説をも内面を構成する要素とする様は、人間の不可解な意識の容態を表したものであるといえるだろう。

夫人の内的独白が示すのは、捉えどころのない「自然」の描写なのである。〈科学対自然〉を装いつつも、「自然」と「科学」とは対立し得ない構造となる。「水晶幻想」における「自然」とは、あくまでもその様態を描いたものにすぎないのである。

四　幻想の批評性

作品全体に〈科学対自然〉という構造を見せつつも、夫人の内向は「科学」に対峙するものではないかのように描かれる。こうした複雑な対立関係が本作にどのような批評性をもたらせるのか。結末部に注目したい。

物語の最終場面において、犬の「交配」が終わった夜更けに、研究室から帰ってきた夫と夫人とが会話を交わす。「犬が孔雀を産むやうな、おとぎばなしの世のなかになつたら、人間は退屈がなくなるわね」と問いかける夫人に、眠りにつこうとする夫は「じやうだんぢやない」と答え、「そんな夢」など実現不可能であることを説く。それに対して夫人は「今日の研究材料」で使った被験体を「人間？　やつぱり死刑囚だつたの？」と問いかける。同時に、彼女の意識には「研究の犠牲」に「自殺」して「青ざめて倒れた夫の死体」が浮かび上がって物語は終わるのである。

ここには「発生学」による生命を製造することへの一つの限界が示唆されているのではないだろうか。「科学」が「自然」を侵犯しても、「自然」以上のものには到達できないというのである。夫人の意識に浮かぶ「夫の死体」はこうした「科学」の末路を暗示したものであろう。

さらにこの会話が交わされる直前には、夫人は夫に次のようにも問いかけていた。

「なぜ人造絹糸をつくるんでせうね。人造大理石。人造真珠。人造皮革。人造鼈甲。人造酒人造コオヒ。人造人間。自然の真似ばかりして、可哀想な人間。自然より美しいものがあるでせうに。人間の夢みる力が貧しいせゐだとお思いになつて。アミイバのそれ、発生学の夢なの？」

「なにがさ？」と、夫は寝台の上であくびをした。

「お疲れになつてるのね。」（生殖によつてわが細胞の不死を信じることが。十四五世紀の火箭。哺乳類の精子模型図。わが百体の一つだにあらざりし時に汝の目は夙くより胚なるわれを見、わが命の総ての日は汝の冊に録されたり。雑種形成で生物の分類をなくすることが。輪廻転生。ピペット。伏姫。顕微鏡のプレパラアト。袖鏡に写る、庭の温室風なガラスを思ひ浮かべることでも、マトキシチンの匂ひ、私はオルガスムスのリズムを殺すことが出来るのだわ。女のひそかな復讐。）

引用部では「人造」物が「自然」の模倣でしかないことが夫人によって述べられている。しかし、その言葉は夫には届かず、夫

人は内向する。ここで明らかになるのは、夫人が自分の意識を多方面に「思ひ浮かべる」ことで、自覚的に「オルガスムス」を抑制しようとしていることである。意識の拡散は能動的に生理現象を支配することができ、それが「女のひそかな復讐」であるというのだ。物語を通して夫は、常に夫人を自身の射程に収めようとする。その関係のなかで夫人は、意識のなかで次々に何かを「思ひ浮かべる」ことで夫への従属を拒む。〈科学対自然〉を止揚したところに本作の到達する「自然」の姿があり、そこでは一つのものを抽出する表象行為を不確定・不明瞭にする表現方法が選択されている。科学的態度に抵抗しようとする作品全体の立場は、こうした抽象化を拒んだ表現のなかに反映されているである。

以上見てきたように、「水晶幻想」で描かれる「科学」の在り方は、同時代における人為的な「人間」の産出が見落としていた暗部を映し出すものであったと。夫人の内面は、言説と言説との飛躍によって一つの表象にとらわれず、多面的に展開する。それは〈科学対自然〉の対立を見せながら、「科学」を内包させる「自然」を描いたものでもあった。優生学をはじめとする同時代の「科学」言説に対峙しようとするこうした立場は、「水晶幻想」が単なる文体的な〈実験小説〉にはとどまらない可能性を持つテクストであることを示すのだ。

注

(1) 川端康成「あとがき」(『川端康成選集　第四巻』改造社、昭和一三・六)。この「手法」とは、アイルランド作家のジェイムズ・ジョイスの作品群に見られた「意識の流れ」と呼ばれる内的独白の表現手法のことである。ジョイスは大正期に日本で紹介され、以降多くの作家がこの表現手法を作品に取り入れていった。川端康成も「ジエイムス・ジョイスの「若き日の芸術家の肖像」」(『時事新報』昭和八・一・六)のなかで「ジョイスを知ることなしに、新しい文学の出発はない」と述べ、ジョイスを高く評価している。ジョイスの手法に新しい文学的な表現の可能性を見出した川端の試みは、「水晶幻想」のおよそ七ヶ月前に発表された「針と硝子と霧」(『文学時代』昭和五・一一)においてもみることができる

(2) 日本におけるジョイスの「意識の流れ」やフロイト学説の受容の流れのなかに本作を位置付けた先行論には、平山城児「「水晶幻想」前後―昭和初年代の日本におけるジョイス、フロイトの需要の実際についての考察」(『英米文学』立教大学英米文学会、昭和四六・三)、大久保喬樹「自然主義モダニズム―近代性から現代性へ」(『日本近代文学』平成九・一〇)などがある。

(3) 日本近代文学大系・四二『川端康成・横光利一』(角川書店、昭和四七・七)「水晶幻想」の長谷川泉の注釈では、「人間の人工授精による人工妊娠児が最初に誕生したのは昭和二三年(一九四八)八月、慶應義塾大学医学部産婦人科においてであって」とある。

(4) 成田龍一「性の跳梁」(脇田晴子、S・B・ハンレー編『ジェンダ

ーの日本史　上』東京大学出版会、平成六・一一）では、「一九二〇年代には性現象をめぐり、性の医学と性愛の精神が発信され、性の跳梁する状況となった、水面下にあった性の領域が浮上し、公然と語られるようになるとともに、性の領域と性の構制が示され、性現象がかたちづくられる。」とある。また、川村邦光は、一九二〇年代を「セクシュアリティの管理・監視をひとつの基軸とした家庭、〝性家族〟が形成され」た「性欲の時代」であったと述べている（『性家族の誕生』筑摩書房、平成一六・七）。

(5) 川端康成「のんきな空想」（『文芸時代』大正一四・二）

(6) 日本における「人工妊娠」に関する医学書は、「独逸医士某」の書を大野勝馬が『人工妊娠新術』（警醒書院、明治二四・七）として翻訳したものがはじめである。この本では女性不妊の対処法として紹介された。また、田村化三郎『子の有る法無い法』（読売新聞社、明治四一・七）では「人工妊娠法」の成果報告があるが、その方法までは「何分精しく述ぶる訳には行かぬ」として言及されていない。対して、大正期の越智・大久保・朝岡らは、成果報告を行うだけでなく、「人工妊娠」の治療方法を具体的に紹介しており、大久保は自身の治療法の特許を出願してもいる。明治から昭和にかけての「人工妊娠」についての整理は、由井秀樹『人工授精の近代』（青弓社、平成二七・三）を参考にした。

(7) 「人工妊娠」の意義について、大久保義一『人工妊娠と避妊の智識』（大久保研究所、大正一三・一二）では、「子供を恵まるゝことなき不幸な夫婦」に「人為人工的に完成せる受胎法を知らしめ、以て社会的責任を果たさしめ、家庭の円満引いては社会秩序の安寧を計り、共に健全なる国家建設の要がある」ことが述べられている。また、朝岡稲太郎『生殖生理と不姙の治療及び人工姙娠法』（健康之友社、大正一四・五）は、「婦人が妊娠分娩すると云ふ事は、女性としての最も尊き天職にして、一家の盛衰、国家の興亡、民族の消長も実に此処に起因する」と主張している。

(8) 「水晶幻想」テクストの『発生学汎論』の引用箇所の照査は、小林洋介「「象徴」による無意識表出」（『〈狂気〉と〈無意識〉のモダニズム』笠間書院、平成二五・二）にまとめられている。小林は、「水晶幻想」の叙述が伊藤整の「意識的な表出」の影響下にあることを踏まえ、本作には、同時代の「精神分析とフロイトの〈象徴〉の概念に関する知識」を持つ読者が夫人の「真理の全貌」を解釈するという構造があることを指摘している。

(9) 大島廣『発生学汎論』（前掲）。『発生学汎論』は、動物各種の個体発生の初期段階を中心に、形態学的な方面からの概説を行なったもので、一般発生学に関する出版が皆無であった時期に出版されたものである。また、本書の特徴として、発生学の研究史が概観されていることや、挿絵を多用した説明、巻末の術語の解説や索引が全体の五分の一を占めていることなどが挙げられる。なお、大島廣の経歴については小林洋介の先行論（前掲）に詳細がある。

(10) 川村邦光『性家族の誕生』（前掲）

(11) 越智真逸『夫婦読本』（文化生活研究会、大正一四・一）の「序文」では、「諺に「千の蔵より子は宝」と云ふことがあります。然し同

じ子宝にも、良い子宝もあれば又、悪い子宝もあります。本書は如何にせば最も優良なる子宝を得べきかを説いたものでありまして、其立論の根拠は優生学（ユーゼニクス）Eugenics 及び、遺伝論 Vererbungslehre の学説でありまして、其他に尚最新の医学を加味せること勿論であります。」と述べられている。

(12) 人口食糧問題調査会・答申「人口統制ニ関スル諸方策」（昭和四・一二）。答申では、「人口ノ民生的状態健全ナル場合ニ有リテモ之ニ統制ヲ加フルニ非ザレバ国力ノ発展、産業ノ振興」は見込めず、「人口対策」は「緊急実施ヲ要ス」ことが述べられる。そこで提示された方策の最後二つの項目には、「避妊ノ手段ニ供スル器具薬品等ノ頒布、販売、広告ニ関スル不正行為ノ取締ヲ励行スルコト」、さらに「優生学的見地ヨリスル諸施設ニ関スル調査研究ヲ為スコト」と記載されている。「人口食料問題調査会」はその後、昭和五年の「民族衛生特別委員会」や、昭和一〇年の「財団法人民族優生学会」設立への足がかりとなった。

(13) 内務省社会事業調査会・答申「児童保護事業に関する体系」（昭和二・二・一六）では、「吾邦人口の激増と過剰の事実より考察し往々児童保護問題の対策を忽にする者なきにあらざるも、該事業は国民の質の改善を目的とするものにして、人口の量の問題解決と混同すべきに非らざるや論なし」と述べられている。なお、このあたりの動向については、廣島清志「現代日本人口政策史小論人工資質概念をめぐって（1916-1930 年）」（国立社会保障・人口問題研究所『人口問題研究』昭和五五・四）が詳しい。

(14) カレル・チャペック『R・U・R』の翻訳を機に日本では、ロボット・イメージをめぐる様々な作品・文献が生み出され、いわゆる「人造人間」ブームが到来した。この動向については、井上晴樹『日本ロボット創世記』（NTT出版、平成五・二）や、吉田司雄、奥山文幸、中沢弥ほか『妊娠するロボット　1920 年代の科学と幻想』（春風社、平成一四・一二）などに詳細が記載されている。

(15) 夫が「化粧机」を夫人に与えることについて、渥美孝子「川端康成『水晶幻想』論」（『東北学院大学論集』昭六三・三）では、「顕微鏡の世界に介入してこようとする夫人の自我をなだめ、そこに封じ込めようとする」試みであったが、却って「顕微鏡から遠ざけるどころか、顕微鏡の世界との亀裂をさらに強く夫人に意識させることになる」と述べられている。

(16) 中村三春「『水晶幻想』のポリセクシュアリティ」（『修辞的モダニズム―テクスト様式論の試み』ひつじ書房、平成一八・六）。中村は、本作のテクストの難解さを「多面的な印象を読者に与えるようなスタイルを実現している」と分析し、「多形的（polymorphous）なテクスト」によって志向される夫人のセクシュアリティは「多形成愛的（polysexual）」に開かれたものであると述べている。

［付記］「水晶幻想」のテクストは、『川端康成全集』第三巻（新潮社、昭和五五・七）所収の本文によった。但し、旧漢字は新字体に改めた。

（本学大学院生）